

後期アルヴァックスの集合心理学について

甲南女子大学 金瑛

1. 目的

本報告の目的は、社会学における集合的記憶論の始祖とされるモーリス・アルヴァックス（1877-1945）が後期に展開した集合心理学の構想の意義を明らかにすることにある。通常の学説史的理解では、社会学初期のデュルケームらの時代においては、他学問に対する社会学の固有性を明確にするために、心理学的な観点を否定することが重要視されたという整理がなされている。だが、セルジュ・モスコヴィッシも指摘するように、むしろ初期のデュルケーム、ウェーバー、ジンメルから、心理現象をめぐる理論は社会学理論において中核的な位置を占めていた（Moscovici 1988=1995）。したがって、20世紀初頭から現代に至るまで続く心理学と社会学の分断状況を克服するためには、社会学理論において心理学が持つ意味を問い直す必要がある。そこで本報告が着目するのは、実証的に観察可能な個人の心理現象に焦点を当てた実験心理学が隆盛し哲学や社会学と差別化され始めるなかで、心理学と社会学の接点を問い直す後期アルヴァックスの集合心理学である。本報告では、アルヴァックスの集合心理学を検討することによって、心理現象に焦点を当てた社会学理論の新たな可能性を探ることにはしたい。

2. 方法

上記の目的を達成するため、本報告では2015年にフランスで出版された後期アルヴァックスの講義録 *La psychologie collective* を中心として検討を行う。その際に着目するのは、デュルケームやタルドなどの先行世代の社会学者、加えて同世代の社会学者マルセル・モースや社会心理学者シャルル・ブロンデルらの理論をアルヴァックスがどう批判的に摂取したかである。

3. 結果

アルヴァックスの集合心理学の構想において重要となるのは、生理学的な心理学と内省的な心理学への批判である。アルヴァックスは両者を批判するなかで、個人的な心理現象の社会性や、諸個人の結合から生じる集合的な心理現象を説明する学問、すなわち集合心理学として社会学を定義しなおした。この試みは、心理学や哲学と領域横断的に心理現象を考察する試みであり、デュルケームの集合表象論や認識の社会学をより発展的に展開したものとして解釈できる。当日の報告においては、カテゴリー・推論・記憶・感情・意志といった、アルヴァックスが中心的に論じている心理現象を俎上に載せて、アルヴァックスの集合心理学が持つ今日的な意義についても言及することにはしたい。

4. 結論

以上の結論として、アルヴァックスの集合心理学には、心理学と社会学の理論を生産的に架橋する社会的な可能性があると考えられる。

文献

Halbwachs, Maurice, 2015, *La psychologie collective*, présenté par Thomas Hirsch, Paris: Flammarion.

Moscovici, Serge, 1988, *La machine à faire des dieux: Sociologie et psychologie*, Paris: Fayard. (=1995, 古田幸男訳『神々を作る機械』法政大学出版局.)

*その他、詳細な参考文献は当日のレジюмеに記載します。